

語り手と聞き手の相互作用の物語論的研究

～運転免許証を自主返納した高齢者へのインタビューを事例として～

1170405 小川 祐樹

高知工科大学マネジメント学部

1. 概要

私が過去に行ったインタビューにおいて、語り手と聞き手との間に相互作用が起き、語り手が自分の人生に関する謎を意識し、その謎の答えを発見する出来事が起きた。私は、この出来事を物語の構成要素として、語り手のライフストーリー(人生の物語)に組み込みたい。だが、ライフストーリー(人生の物語)の研究にこの考え方の方法論はない。そこで、語り手が人生に関する謎の答えを発見した場面と、その答え発見までの過程で、語り手の感情に変化があり、且つ聞き手の関係性に変化が見られた箇所を全て、物語の定義に沿って、物語化すると、5個の物語ができた。そして、5個の物語から語り手が聞き手と相互作用した経験や聞き手が語りの産出に重要な役割をどのように担うのかを理解する。その結果、この出来事を、語り手のライフストーリー(人生の物語)の一構成要素とする方法の提示に成功した。さらに、他のインタビューでも語り手と聞き手に相互作用を起こすことが可能となった。

2. 背景

やまだようこ(やまだようこ, 2000)によると、文化人類学や社会学では、伝統的にライフヒストリー研究が蓄積されてきた。ライフヒストリー(生活史)とは、〈ライフヒストリーの社会学〉(中野・桜井, 1995)では、語り手が自分の人生や経験した事柄について語り、それを口述資料とし、研究者が近現代の社会史と照合し位置づけ、注記を添え構成したものとされ、マン(Mann, S. J. 1992)によると、人生の歴史的真相をあらわそうとしているものだとされている。これを、やまだようこの〈人生を語る—生成のライフストーリー〉の中の言葉を用いて表現すると、ライフヒストリー(生活史)とは、記憶庫に固形物のように蓄積された「過去」を想起することによって、「過去」をそのままの形で引き出すという考え方である。

それに対して、ライフストーリー(人生の物語)とは、〈ライフヒストリーの社会学〉(中野・桜井, 1995)では、語り手が自分の人生や経験した事柄について語っているものとされ、マ

ン(Mann, S. J. 1992)はライフストーリー(人生の物語)を「ライフヒストリーのうちの他者に対して語られた部分である」(Kotre, J., 1984)、「相互作用のなかで生成された口述の自叙伝的ナラティブ(物語)である」と定義し、生きられた人生の経験的真相をあらわそうとしているものだとされている。さらに、やまだようこ(やまだようこ, 2000)は、ライフストーリー(人生の物語)を、「その人が生きている経験を有機的に組織し、意味づける行為である」としている。すなわち、ライフストーリー(人生の物語)を先程と同様にやまだようこの〈人生を語る—生成のライフストーリー〉の中の言葉を用いて表現するならば、「過去」は記憶庫に固形物のように蓄積され、想起は「過去」をそのままの形で引き出すというわけではなく、時間的に後から来るものによって、「過去」は「現在」と照合されてたえず再編成され、読みかえられて変容するという考え方である。このライフストーリー(人生の物語)の研究は、やまだようこの〈人生を語る—生成のライフストーリー〉によると、ライフストーリー(人生の物語)研究の開拓者の1人であるマクアアダムス(McAdams, D. P., 1993)やオービン(1998)などによって、従来の心理学概念と異なる分野として確立された。心理学は、短いスパンで自己の行動や説明や内観を研究してきたが、人生という長い時間軸のなかで人が自分自身の経験をどのように組織するか、どのように意味づけるかという問題を無視しすぎたといえる。それに対し、物語論の基礎にあるのは、個々の要素は同じでも、それをどのように関連づけ、組織立て、筋立てるかによって、人生全体の意味は大きく変化する。その意味づけに語り手が果たす役割を本質的とみなす考え方である。(南・やまだ, 1994; 1996 やまだ・南, 1995)。

このライフストーリー(人生の物語)の研究方法を用いて、語り手のライフストーリー(人生の物語)の研究をしようとする際、語り手自身が自分の人生に関する謎を意識し、その謎の答えを発見するというプロセスに聞き手が大きな役割を演じ

ている場合には、行わなければならない重要な作業がある。それは、語り手と聞き手との間に生じた相互作用自体を物語化し、それを語り手のライフストーリー(人生の物語)に組み込む必要があるということだ。

なぜならば、自分の人生に関する謎を意識している語り手が、インタビューの最中、聞き手とのやり取りから様々な影響を受け、自分の人生に関する謎の答えを発見した時、その語り手は自身の「過去」を再編成するという作業を行う。そうして、再編成され新しく生まれ変わった「過去」は、語り手のライフストーリー(人生の物語)となる。語り手が行ったこの作業は、これまでの語り手のライフストーリー(人生の物語)を大きく変化させる可能性があり、そのこと自体が語り手人生にとって重大な出来事となるからである。だからこそ、インタビュー内で、この出来事が起こるに至るまでの語り手と聞き手の相互作用を物語化し、語り手のライフストーリー(人生の物語)に組み込むことが必要なのである。

しかし、今現在、ライフストーリー(人生の物語)の研究方法で、語り手と聞き手の相互作用を物語化するという方法は、明確に確立されてはいない。

3. 目的

物語論のフレームを用いて、語り手が聞き手と相互作用した経験を理解する。これにより、聞き手が語りの産出に重要な役割をどのように担うかを明らかにする。

なお、物語論的フレームワークを用いることにより、分析者は語り手に感情移入しやすくなり、語り手の感情の変化を抽出しやすくなる。

4. 研究方法

本研究では、まず、物語の定義を開発し提示する。その後、以下の手順に沿って研究を進める。

① インタビューの題材を見つけ、実際に対象者へインタビューを行い(複数回)、そのインタビュー内容を録音したものを文章へ書き起こす。

② 文章へと書き起こしたデータを読み、その中から、語り手自身が自分の人生に関する謎の答えを発見した場面を物語の構成要素である【謎追い型】か【思い出し型】のどちらかの形で、簡潔に物語化し、タイトルをつける。さらに、書き起こしデータの初めから、謎の答えの発見に至るまでの中で、語り手と聞き手の関係性に変化が見出された箇所を複数

特定し、先程同様、どちらかの形で簡潔に物語化し、タイトルをつける。

③ ②でつくった物語の一覧を作成し、完成した一覧表から、それぞれの物語がどの時点で生じた出来事によって構成されているのかを理解する。さらに、各物語が他の物語の形成にどのように貢献しているのかを読み取る。

5. 結果

5.1 物語の定義開発

やまだようこは、〈人生を語る一生成のライフストーリー〉の中で、「物語」を、「2つ以上の出来事(events)をむすびつけて筋立てる行為(empplotting)」と定義している。

さらに、橋本陽介の〈ナラトロジー入門—プロップからジュネットまでの物語論—〉の中に登場するバルト(Barthe, Roland)は〈物語の構造分析序説〉で、物語の筋を展開させるすべての出来事を「機能」という単位から分析した。そして、物語では、必ず二択が出現し、それが物語を進める機能となるとしている。この二択をせまることによって物語の筋を展開させるような機能をバルトは枢軸機能体(または核)と呼んだ。

さらに、同書の中で、プロップ(Propp, Vladimir)は物語の機能はその多くがペアになっており、何らかの行為が行われることによって、次の展開が論理的に導かれるとしている。

このことを踏まえ、本研究では、「物語」を、「出来事を時間の順序に沿って、並べたものであり、しかも次のいずれか(《謎追い型》もしくは《思い出し型》)の対となる二つの出来事を含むもの」と定義する。

《謎追い型》とは、Barthe, Roland や Propp, Vladimir の考えと類似している。物語のある場面で、疑問が発生する、その後、物語が時間軸に沿って展開していき、ある場面において疑問の答えが明らかとなり、解消されるという2つの場面がペアとなって成立するものである。

《思い出し型》とは、本研究の一環として様々な映画を鑑賞する中で開発された本研究独自のものである。物語のある場面において、出来事が発生するが、この時点では、特に疑問や違和感はない(出来事1)。その後、物語が時間軸に沿って展開していき、ある場面において出来事が発生(出来事2)した際、(出来事1)が(出来事2)を引き立たせるための伏線であったことに気が付くというものであり、これも2つ場面

がペアとなって成立するものである。

5.2 ①の実行

本研究ではインタビューの題材として、運転免許証の自主返納制度を利用した高齢者へのインタビューを採用した。

運転免許証の自主返納制度とは、加齢に伴う身体機能や判断力の低下により、運転に不安を感じる方などが、自主的に運転免許証の取り消し(全部取り消し又は一部取り消し)を申請することができる制度である。

平成 10 年の道路交通法の改正により、制度が開始された。

運転免許証を返納した場合、「運転経歴証明書」の申請をすることができる。この運転経歴証明書を持っていると、市営バスやタクシーなどの乗車運賃の割引や、商品代金の割引など様々な特典サービスをうけることができる。

出典：京都府ホームページ「高齢者運転免許証自主返納施策について」より

そして、実際に運転免許証の自主返納制度を利用した高齢者である堀田(仮名)さんへ全 4 回のインタビューを行った。

インタビューを行った日付をまとめたものが表の 5-1 である。

表 5-1 インタビューを行った日付

第 1 回	2015 年 7 月 10 日
第 2 回	2015 年 7 月 17 日
第 3 回	2016 年 7 月 20 日
第 4 回	2016 年 8 月 5 日

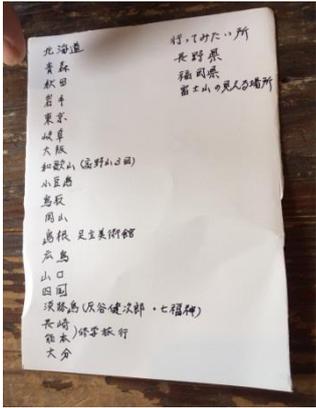
インタビューの質問内容としては、免許返納に至るまでの過程や対象者のこれまでの人生での車との関わり方、さらに、車以外にも、対象者の幼少期の思い出や、家族との関わりなど、過去から現在に至る記憶を収集する。記録方法として、堀田さん本人に許可をもらい、IC レコーダーを使い録音し、その後文章へ書き起こした。全 4 回のインタビューの概要とインタビュー後の堀田さんの行動をまとめたものが表の 5-2 である。

表 5-2 全 4 回のインタビューの概要とインタビュー後の堀田さんの行動

	<ul style="list-style-type: none"> 聞き手が、堀田さんの年齢から免許を返納される方の中では、若い方だと述べると、堀田さんは、自身の病気について語り、その病気が返納する要因であることを明かす。
--	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

第 1 回	<ul style="list-style-type: none"> みんなにまだ乗れるのではないかと問われたという話から、聞き手が具体的に誰から問われたのかと尋ねると、堀田さんは、息子などと答えた。その話の流れから聞き手が、息子さんとの関係について尋ねるも、堀田さんは、あまり話さず、その後すぐに別の話へと切り替えた。 堀田さん自ら、BMW が大好きだと明かし、現在までの BMW との関わりについて語る。 聞き手から、免許取得時のことについて尋ねられ、堀田さんは、免許を取得するきっかけは、子育てに役立てるためだったと明かす。そして、その後、免許を活かし、運送ドライバーやタクシードライバーの仕事についてを明かし、それぞれの仕事内容を語る。 堀田さん自ら、タクシードライバー時代の印象に残っているエピソードを語る。 ※エピソードの内容としては、「警察署長を酔っ払いと勘違いしていた話」、「泣きながら乗車してきた女性の話」、「和歌を詠んでくれたお客さんの話」などである。 聞き手から、免許を返納した日のことについて聞かれ、堀田さんは、その日の動きや免許センター職員とのやり取りについて語る。 聞き手から、免許取得前の車との関わりや車以外には興味はなかったのかなどと車に関することについて様々聞かれるも、堀田さんは、昔のことだからあまり覚えていないと答える。 聞き手から、BMW の何がよいのかと問われ、堀田さんは、BMW のよさについて熱く語る。その後、BMW にあこがれをもったのは、友人の BMW を運転したことだと明かす。
第 1 回後	<ul style="list-style-type: none"> 堀田さんは、自身の返納を後押ししてくれたある本の存在を思い出し、探し出す。
	<ul style="list-style-type: none"> 堀田さん自ら、自身の返納を後押ししてくれたという本を聞き手へ差し出した。その後、本の内容について語り、この本を読んだこと

第2回	<p>で事故を起こした時の大変さや怖さを感じたと明かす。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 堀田さん自ら、タクシードライバーをやめた後に、1度別の仕事に就いたが、予想以上のハードワークが原因となり、怪我をしましてまいすぐに仕事をやめてしまったのだと明かした。 ● 聞き手から、幼少期から20代までのことについて様々聞かれるも、堀田さんは、消極的になり、あまり多くを語らない。 ● 聞き手から、堀田さんがタクシードライバーとなった当時は、女性のタクシードライバーは珍しかったのではないかと聞かれると、堀田さんは、積極的にタクシードライバー時代の苦労話や、自動車学校に通っていた頃の話、運転の魅力など、様々話してくれる。さらに、プロのタクシードライバーということ意識するきっかけとなった出来事について明かす。 ● 聞き手から、幼い時から自転車が好きであったとか、乗り物が好きだったという話があれば納得できるが、そうではない堀田さんは、どういうふうに車が好きになったのかと問われ、堀田さんは、運転は自分の行動範囲を広げることができる、だから、単純に好きなのだ と答える。 ● 堀田さん自ら、自身の性格が原因で、タクシー会社の社員や社長と喧嘩になったエピソードについて語る。 ● 聞き手から、タクシードライバー時代の休日の過ごし方について問われ、国内の様々なところに旅行に行ったと明かす。 ● 堀田さんが本を読むのが好きだということから聞き手が、どんな本が好きなのかと尋ねると、堀田さんは、優しい文体の本が好きだと明かす。さらに、その話の流れから読み終わった本はどうしているのかという質問に、堀田さんは、売らずに、本が好きな会社の同 	<p>僚にあげていたと答えた。その際、堀田さんは、自身が離婚していることをさり聞き手に告げた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 聞き手から、本を溜めずに減らそうと思いつめたのはいつ頃かと問われ、堀田さんは、60歳を過ぎ、自身の年を考えだした時だと答える。その後、その話の流れから堀田さんは、タクシードライバーという仕事を長く続けると、体に負担がかかり、病気をしたり、事故を起こしたりするなどのデメリットがあることを明かす。 ● 堀田さんが行っている編み物について、聞き手が何故編み物を始めたのかと尋ねると堀田さんは、ぼけ防止のためだと答える。その後、その話の流れから縫製の仕事をしていた堀田さんの母親の話となった。その話の中で、堀田さんは、母親のプロ意識を垣間見たエピソードや、自分が運転をすることが好きなように、母親も縫製の仕事が好きであり、生甲斐だったと思うと明かす。
	第2回後 (数時間)	<ul style="list-style-type: none"> ● 堀田さんから聞き手に電話がある。その電話の中で堀田さんは、BMWが大好きなことや大好きなタクシーの話自分を誰かに聞いて欲しかったのだということに気が付いたと明かす。
	第2回後 (1週間)	<ul style="list-style-type: none"> ● 実の父親が馬車に乗っていたことを思い出し、実の父親は馬車、自分は車という類似点の発見を喜ぶ。
		<ul style="list-style-type: none"> ● 聞き手から、免許を返納してから約1年経つが、現在の生活はどうかと問われ、堀田さんは、そんなに不便は感じないと答える。だが、その後返納したことを後悔したというエピソードを明かす。 ● 聞き手から、BMWを購入するまでの経緯について問われ、堀田さんは、購入する際、金額の面で苦労したことなどを明かす。さらに、その後、BMWに乗ることで、優越感を得ることができると明かす。

<p>第3回</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 聞き手の質問から堀田さんの母親についての話となり、その話の中で、堀田さんは、義理の父とはあまり折り合いがよくなかったことを明かす。 ● 堀田さんの母親についての話をしていると、堀田さんが突然、自分が2歳の時に亡くなった実の父親は、馬車に乗っていたのだと明かす。その後、そのことを思い出した経緯について語り、実の父親と自分の類似点を発見できたことを嬉しく思ったと明かす。 ● 聞き手が再度、堀田さんの母親について聞いていると、堀田さんは、母親とは性格的に合わず、あまり好きではなかったと明かす。だが、その後、母親が誇りをもって仕事をしていたことに関しては、母親のことを尊敬していると明かす。 ● 聞き手が、今後足腰を悪くした場合、タクシーを利用するかと尋ねると、今はまだタクシーを呼ぶことに抵抗があるが、今後は抵抗を感じてもタクシーを呼んで利用しようと思っていると答えた。 ● 聞き手が、実の父親の話を第2回のインタビューでしなかったのは、免許返納と関係ないと思ったからかと尋ねると、堀田さんは、そうではなく、第2回のインタビュー後に思い出したのだと答える。さらに、その後、実の父親が馬車に乗っていたことを思い出した経緯について細かく語る。 ● 聞き手が、実の父親の話を母親から聞いたことはあるのかと尋ねると、堀田さんは、実の父親のことは、母親がよく話をしてくれたと語り、母親は、実の父親のことを愛し、尊敬していたと明かす。 ● 聞き手が、堀田さんは、実の父親のことを尊敬しているかと尋ねると、堀田さんは、もちろんだと答え、それ故に、義理の父親とはうまくいかなかったのだと明かす。さらに、その後、自分は実の父親にとっても会いたかった 	<p>第4回</p>	<p>し、生きていてほしかったと明かす。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 聞き手から、実の父親が馬車に乗っていたことを思い出した経緯について、前回よりも深く追及され、堀田さんは、より具体的に思い出すに至るまでの経緯について語る。その話の中で、堀田さんは、第1回、第2回のインタビューの中で、聞き手から執拗に車が好きな理由を問われ、第2回のインタビュー後もその理由をかんがえている時に、実の父親が馬車に乗っていたことを思い出したのだと明かす。 ● 堀田さんが自ら、最近息子に誕生日にランチをごちそうになり、その時息子から免許を返納しなかったレンタカーを借りて好きなところへ行けたのと言われたと明かす。その後、その話の流れから、堀田さんが旅行で訪れたところを一覧にまとめた紙を聞き手へ差し出し、聞かれるだろうと思って用意したと明かす。  <ul style="list-style-type: none"> ● 聞き手が、堀田さんの息子に旅行に連れてってもらったらどうかと言うと、その後堀田さんは、これまであまり語らなかった、自分の息子の話や、別れた元夫についての話を聞き手へ語る。 ● 聞き手が話を実の父親のことへ戻し、実の父親が馬車に乗っていたことを思い出した時の堀田さん気持ちは、どうであったかと尋ねると、堀田さんは、実の父親のことをあまり知らず、似ているともないと思っていた自分と実の父親に「車」という共通点があったことで、実の父親との繋がりを感ずることができ、嬉しかったと明かす。
------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

	<ul style="list-style-type: none"> ● 聞き手から、どのような時に、実の父親のことについて考えることがあったかと尋ねると、堀田さんは、辛い時や苦しい時に実の父親がいてくれたらなと思うことがよくあったと明かす。その後、その話の流れから堀田さんが若かりし頃にタクシー会社で経験した嫌がらせの話となった。その話の中で堀田さんは、離婚したことによって、離れ離れになった娘に辛い思いをさせているのに、自分が弱音など吐けないと思い、嫌がらせに屈することなく頑張ったと明かす。 ● 聞き手から、実の父親との繋がりや発見がどういう意味で堀田さんにとっては大事なのかと尋ねると、堀田さんは、実の父親と似たところもなく、実の父親との思い出もなかった自分が実の父親の血を受け継いでいたのだと思えば、嬉しいじゃないかと答えた。 ● 聞き手が、堀田さんと実の父親はどちらも強い人という点で、似ているのではないかと言うと、堀田さんは、頑固なところ実の父親と似ているかもしれないと答えた。さらに、その後、頑固なところは娘とも息子とも似ていると明かす。 ● 聞き手から、旅行についての話をされると、堀田さんは、様々な旅行先での思い出を語る。
--	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

そして、インタビュー対象者である堀田さんの概要をまとめたものが表の 5-3 である。

表 5-3 堀田さんの概要

幼少期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高知県香美市物部町大柄生まれの女性 ・ 2 歳の時に父親が事故により亡くなり、その後母親が再婚するも、親子関係はあまりうまくいかない ・ 中学校卒業後は、スーパーや縫製など 6 年間で 20 近い仕事を転々とする
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 24 歳の時に結婚し、二人の子供を儲ける（現在は離婚している） ・ 26 歳の時に運転免許証を取得 ・ 30 歳の時からトラックの運転手として、運送会社に 10 年間勤務する

壮年期	<ul style="list-style-type: none"> ・ その後、運送会社をやめ、タクシーの運転手として、タクシー会社に 23 年間勤務する ・ インタビューの中で「タクシーに乗れなかったら私、免許もっている意味がない。」と言い切るほど、タクシーの運転手に強いこだわりをもっていた ・ BMW 社の車が好きで、現在までに 3 台の BMW 社の車を購入
老年期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 61 歳の時に突発性難聴を発症する（片耳） ・ 64 歳の時には中耳炎を発症し、同年 3 月には、車の運転をやめ、同年 6 月に会社を辞める ・ 65 歳の時に運転免許証を返納 ・ 高血圧のため、現在も月 1 回通院している

5.3 ②の実行

研究を進め書き起こした文章を分析した結果、書き起こした文章の初めから、語り手自身が自分の人生に関する謎の答えを発見に至るまでの中で、語り手と聞き手の関係性に変化が見出された箇所と、語り手自身が自分の人生に関する謎の答えを発見した場面とを合わせて全部で 5 つの物語化することに成功した。以下で、簡潔に作成した物語を物語のタイトルとともに掲載していく。

『語り手と聞き手の相互作用物語 その 1』
—離婚の開示の物語—

① 返納前の話をしている中で、堀田さんに、返納することを考え直すように助言した人たちがいた。その中に息子も含まれており、その流れで聞き手が、堀田さんへ現在の息子との関係について尋ねた。すると、堀田さんは、現在は一人暮らしをしていることを明かした。

② 聞き手は、①の後堀田さんが話題を変えたことから、まだ心を開いておらず、家族についてあまり語りたくないのではないかと感じた。

③ 堀田さんの趣味の一つである読書の話の中で、読み終わった本の処分の仕方について問われると、堀田さんは、離婚して以降、家の中が本で溢れていたと語り、離婚していたことを明かした。

④ 聞き手は③で、堀田さんが躊躇することなく離婚していたことを明かしたことから、堀田さんが 2 回目のインタビューで随分と心を開き、聞き手との信頼関係を構築し始めたのではないかと感じた。

この物語において、語り手と聞き手の関係性の変化を最も的確且つシンプルに表現しているキーワードは【信頼関係】である。

『語り手と聞き手の相互作用物語 その2』

—涙の客を放っておけなかった理由の探究物語—

① タクシードライバー時代のエピソードの話をしている中で、泣きながら乗車してきた若い女性の話になった。堀田さんは、その女性が娘と重なって見えたこともあり、その女性の相談に乗ってあげ、いつしか自分も泣いてしまっていたことを明かした。

② ①の前では笑えるエピソードを語った堀田さんが、①では一瞬家族に触れた。だが、その後すぐ明るいエピソードに切り替えたことから、聞き手は、①の前では、話してあげるというスタンスだった堀田さんの意識が①では、聞いて欲しいというスタンスに変化したものの、その後また話してあげるというスタンスに戻ってしまったのではないかと推測した。そして、このことから現段階ではまだ堀田さんと聞き手の間には隔たりがあるのではないかと感じた。

③ 堀田さんが、タクシードライバーに成り立ての頃の苦労話の中で偶然、過去の娘とのエピソードが出てきた。それはまだ堀田さんが若い頃の話である。夫と離婚をし、家を離れ高知の町を運転していると娘からの手紙の存在に気付いた。その手紙には、「私はお父さんもお母さんも好きだから別れないで欲しい。」という娘の切実な想いがつづられており、その手紙を見た堀田さんは、はりまや橋の交差点の真ん中で、車を停めて泣いたそうだと。

④ ③の話の前後では、第4回目のインタビューということもあり、聞き手の質問に対し、堀田さんの答えがより踏み込んだプライベートなものになっていることに加え、より長く話していることから、堀田さんが聞き手に対し、自分の思いを積極的に聞いて欲しいというスタンスになっていると感じた。そして、このことから、②で感じた堀田さんと聞き手の間には存在した隔たりがなくなったことを実感した。

この物語において、語り手と聞き手の関係性の変化を最も的確且つシンプルに表現しているキーワードは【積極的】である。

『語り手と聞き手の相互作用物語 その3』

—本を持参するまでの経緯探究物語—

① 1回目のインタビュー後堀田さんは、ある本の存在を思い出し、その後その本を探し出した。

② ①から堀田さんが、1回目のインタビューで何かしらの影響を受け、自発的に行動したのではないかと聞き手は感じた。

③ 前回のインタビューについて話していると、不意に堀田さんは①で見つけた本を取り出し、この本が自分の免許返納の後押しをしてくれたのだと明かした。

④ ③から、2回目のインタビュー前に①で見つけた本を持っていこうと決断してきてくれたということになる。このことから、堀田さんが、インタビューに対して前向きになっているのではないかと聞き手は感じた。

この物語において、語り手と聞き手の関係性の変化を最も的確且つシンプルに表現しているキーワードは【自発的行動】である。

『語り手と聞き手の相互作用物語 その4』

—タクシーへの愛情をあらわにする物語—

① 堀田さんの幼少期について、聞き手から、様々質問を受けるが、堀田さんはその質問に対しても素っ気なく短く答え、消極的であった。これを受け、聞き手が、プライベートなことまで聞かれることは不快かと尋ねると、堀田さんは、別に嫌ではないと答えた。

② ①以前では、インタビューに対して積極的な姿勢だった堀田さんが、①では急に消極的になってしまった。このことから、堀田さんは①の周辺で、どこまでプライベートを開示するか悩み葛藤しているのではないかと聞き手は感じた。

③ インタビュー後半からタクシードライバー時代の話になると、堀田さんは自ら笑い話をするなどインタビューに対して、積極的になった。

④ ③の少し前から堀田さんの口調が聞き手に対して、意見や同意を求めるような口調になることが徐々に多くなっている。このことから、②での葛藤に決着がつき、その結果堀田さんは、自分の全てを開示することを決め、聞き手に自分の思いを聞いても欲しいという姿勢になったのだと思われる。さらに、インタビュー後に、堀田さんは、自ら聞き手に

電話を掛け、自分は誰かに話を聞いて欲しかったのだという事に気づいたと語っていることから、このインタビューが堀田さんの奥深くに眠っていた真の思いを呼び起こし、さらに、インタビューの記憶が後々まで影響を与える程、堀田さんの脳裏に強く焼き付いたのではないかと聞き手は感じた。

この物語において、語り手と聞き手の関係性の変化を最も確且つシンプルに表現しているキーワードは【開示】である。

『語り手と聞き手の相互作用物語 その5』

—実の父親との繋がり探究物語—

① 堀田さんは、1回目、2回目のインタビューの中で、聞き手から再三にわたり、車が何故好きなのかと問われることに関しては、疑問を感じ、少なからず不快な思いをしていた。

② インタビュー中に聞き手からの①の質問を何度も投げかけられ、堀田さんはその度に質問の答えを考えたものの、好きなほかに理由があるのだろうかと思い、インタビュー中には答えを出すことができなかった。

③ 堀田さんは、インタビュー後も①の質問を考え続けた結果、2回目のインタビューから1週間後に①の答えを自立的に発見することができた。

④ 2回目のインタビューから約1年後に行われた3回目のインタビューの中で堀田さんは、実は自分の実の父親は馬車を使って仕事をしていたのだと明かし、自分が車を好きなのは、実の父親の血を受け継いでいるからだとし、①の答えとした。そして、そのことを思い出した時、自分が実の父親と同じように運転をする仕事をしていたことを嬉しく思ったと明かした。

この物語において、語り手と聞き手の関係性の変化を最も確且つシンプルに表現しているキーワードは【自立的発見】である。

5.4 ③の実行

その1からその5の物語について、《謎追い型》か《思い出し型》かを特定し、《謎追い型》については、疑問の提示箇所とその答えの箇所を特定した。《思い出し型》については、伏線と、それに対応する箇所を特定した。そして、それらを一覧表にしたのが、表5-4である。

表5-4 物語の一覧表

	物語 その1(離婚の開示の物語)	その2(涙の客を放っておけなかった理由の探求物語)	その3(本を持参するまでの経緯探究物語)	その4(タクシーへの愛情をあらわにする物語)	その5(実の父親との繋がり探究物語)
第一回	プライベートなことは語らない	聞かれたことへの答えを「話してあげる」という姿勢			
第一回後			本の存在を思い出し、自発的に探し出す		
第二回	聞き手を信頼し過去の離婚歴を明かす		聞き手に見せようと本を持参する	プライベートを開示してよいのか悩み葛藤する	聞き手から車が好きな理由を執拗に問われる
第二回(数時間後)				葛藤に決着が付き、話を聞いて欲しかったのだと電話してくる	
第二回(1週間後)					車が好きな理由を父の存在に見出すという自発的発見
第三回					
第四回		自分の思いを「聞いて欲しい」という姿勢			

そして、この一覧表から、それぞれの物語がどの時点で生じた出来事によって構成されているのかを理解した上で、各物語が他の物語の形成にどのように貢献しているのかを読み取り、まとめたものが、以下である。

語り手の【自発的行動】(物語その3)は、【自立的発見】(その5)の予備的動作となっていた。

そして、これまでに語り手と聞き手が築いてきた【信頼関係】(その1)は、【自立的発見】(その5)をする際に、語り手の【自立的発見】(その5)を促進させるためのプレッシャーとなり、【自立的発見】(その5)に貢献した。

さらに、【信頼関係】(その1)は、語り手のプライベート【開示】(その4)の決断にも影響を与えている。

そして、語り手の【積極的】(その2)になった思いは、【信頼関係】(その1)同様【自立的発見】(その5)をする際語り手に、【自立的発見】(その5)をし、それを聞き手に教えたという思いとして作用し、【自立的発見】(その5)を後押しした。

これを図で表したのが図5-5である。

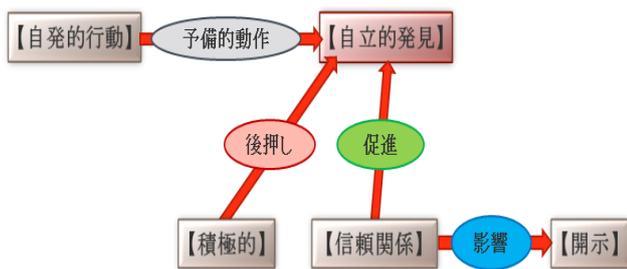


図 5-5 各物語が他の物語の形成にどのように貢献しているのかを表したマップ

6. まとめ

5. 結果から、語り手と感情の変容から聞き手の関係性に変化が見出された 4 個の物語のほとんどが、様々な形で語り手が人生に関する謎の答えを発見した場面の物語に関与していることがわかった。これによって、語り手が人生に関する謎の答えを発見するまでの出来事を、語り手のライフストーリー（人生の物語）の一構成要素とする方法を提示することに成功した。さらに、聞き手が語りの産出に重要な役割を果たすためには、「インタビュー内における信頼関係の構築」、「インタビューにおける積極的姿勢の促し」、「インタビュー外の場面における自発的行動の促し」の 3 つによって、語り手を自分自身の人生の謎と向き合わせ、自立的発見を促すことが必要であるということがわかった。

参考文献

- [1] やまだようこ(2000),「人生を語る—生成のライフストーリー」, ミネルヴァ書房
- [2] 中野卓・桜井厚(1995),「ライフヒストリーの社会学」, 弘文堂
- [3] Mann, S. J. (1992), Telling a life story : issues for research. *Management education and development*, 23(3)271-280.
- [4] Kotre, J. (1984), *Outliuing the seif*. W. W. Norton & Company.
- [5] McAdams, D. P. (1993), *The stories we live by*. Morrow.
- [6] McAdams, D. P., & Aubin, E. S. (1998), *Generatiuity and adult deuelopment*. Amer-ican Psychological Association.
- [7] 南博文・やまだようこ(1994),「人生を語ることの意味 1—生涯発達をとらえる視点・方法を求めて」, 日本発達心理学第 5 回大会論文集, 77.

[8] 南博文・やまだようこ(1996),「人生を物語ることの意味 3—場所の語りと語りの場所性」, 日本発達心理学会第 7 回大会論文集, S25.

[9] 南博文・やまだようこ(1995),「老いることの意味」, 金子書房

[10] 橋本陽介(2014),「ナラトロジー入門—プロップからジュネットまでの物語論」, 水声社

[11] Barthe, Roland. (1966), 花輪光(訳)(1979),「物語の構造分析」, みすず書房

[12] Proop, Vladimir. (1969), 北岡誠司・福田美智代(訳)(1987),「昔話の形態学」, 白馬書房